

英語を母語としない生徒に対する言語教育

-カリフォルニア州の公立高校の事例研究から-

小林 宏美

1. はじめに

1980年代以降、カリフォルニア州では中南米系移民の増加に伴い、公立学校における移民児童生徒が増加した。このような移民の子どもの多くは英語力が十分ではなく、学習の遅れ、中途退学、スペイン語を話す教師の不足など教育現場や教育行政に様々な課題をもたらした。また、英語力が不十分な児童生徒に対する二言語教育プログラム¹⁾に税金を投入しても英語能力の向上につながっていないとの批判から、1998年に住民提案227が可決され、カリフォルニア州における二言語教育プログラムは原則的に廃止されることになった (Crawford, 1999; 小林, 2008)。

本稿では、移民が多数居住するコミュニティで、英語を母語としない生徒に対する言語教育がどのように実施され、どのような課題があるのかという問いに対する答えを求めて、移民の集住地域であるロサンゼルス都市部の2つの公立高校で実地調査を行った²⁾。

2. 先行研究

アメリカ合衆国 (以下、アメリカ) では、英語力の不十分な児童生徒に対する言語教育に関して、長年の研究と実践が蓄積されてきた (Hakuta, 1986; Baker, 1993)。Krashen のモニターモデル³⁾は第二言語習得⁴⁾についての影響力のある理論で、とりわけ英語を母語としない生徒の多いロサンゼルス⁵⁾の教育現場の教師たちに支持されている (Krashen & Terrell, 1983)。モニターモデルの中心的仮説であるインプット仮説では、言語の習得は理解できるインプットを十二分に与えられてゆるやかに形成される。理想的なインプットは、現在の能力レベルより少し高いレベルのインプットを与えることであるという。一方、Swain (1985) は、第二言語学習者の伝達能力発達において、インプットだけでなく、理解可能なアウトプットが重要だと主張している。

Cummins (1981) の発展的相互依存説 (Developmental Independence Hypothesis) によると、1つの言語で学んだ内容は、もう一つの言語に直ちに転移できる可能性がある。す

なわち、第二言語の習得は、第一言語がどの程度発達しているかに依存する。換言すれば、子どもの第二言語における能力は、すでに第一言語で獲得した言語能力のレベルに依存しており、第一言語が発達しているほど、第二言語も発達しやすくなる。Krashen (1996) は、第二言語学習において学習者は自分が聞いたり読んだりする内容を理解する必要があり、そのために母語を使って理解可能なインプットを与えることが役立つと論じる。さらに Krashen は、母語の助けを借りた学習により、学習者が知識と読み書き能力を一旦身に付ければ、それらの能力を第二言語に転用することが可能だという。他方、Hakuta らは、英語が不十分な子どものバイリンガル教育を考える上で、子どもの家庭の貧困の問題について目を向けることが重要だと論じている (Hakuta, Butler & Witt, 2000)。

3. 調査の概要と調査方法

(1) 調査地の公立学校における英語能力が不十分な生徒に対する言語教育

カリフォルニア州には英語能力の不十分な生徒 (English Learners、以下 EL 生徒)⁵⁾ が非常に多い (California Department of Education, 1999)。2008 年度、カリフォルニア州の公立学校に在籍する EL 児童生徒数は約 151 万人⁶⁾であった。同州の EL 児童生徒への言語教育は一応制度化されているといえよう。具体的にはまず、カリフォルニア州教育法で EL 児童生徒に対して、特別な教育プログラムを実施することが規定されている (California Department of Education, 1999)。例えば、ELD (English Language Development)⁷⁾と呼ばれる英語の特別クラスや、児童生徒の母語を使って英語や教科を指導する二言語プログラムなどがある。また、入学した生徒が EL 生徒かどうかの判定方法や規準も明確化されている。ロサンゼルス統合学区 (Los Angeles Unified School District, 以下 LAUSD)⁸⁾では、標準化されたプレースメントテストが存在する。さらに、EL 生徒のために開発された共通の教科書が学区によって認定されている。そして、教師は EL 生徒を指導するための資格が求められ、その資格を得るために大学や学区の教育機関が提供する所定のコースを受講するか、一定の単位を取得する必要がある。

(2) 調査対象校の概要

調査対象高校は、LAUSD の公立高校 2 校である。A 校はロサンゼルス市の西方に位置し、2008 年度生徒数 2, 682 人であった。一方、B 校は同市ダウンタウンの西に隣接する生徒数 1, 472 人の高校である。表 1 に示すように、A 校におけるヒスパニック系の生徒の割合は 54%、B 校では約 9 割を占めた。

表 1. A 高校及び B 高校在籍生徒の人種・エスニシティ構成 (2008-09 年)

	A 高校	B 高校
ヒスパニック系	1,455 (54.2%)	1,305 (88.7%)
アジア系	580 (21.6%)	108 (7.3%)
アフリカ系アメリカ人	455 (16.9%)	47 (3.2%)
白人 (非ヒスパニック系)	180 (6.7%)	8 (0.5%)
アメリカインディアン、 アラスカ先住民	7 (0.3%)	4 (0.3%)
太平洋諸島系	5 (0.2%)	0
計	2,682	1,472

出典 : Los Angeles Unified School District, LAUSD School Profile より作成

表 2 は、2008 年度の A 校及び B 校に在籍する EL 生徒数ならびに無料・減額ランチ受給者⁹⁾数と割合を表す。A 校の EL 生徒は全体の 18%であったのに対し、B 校は 47%でおよそ 2 人に 1 人である。表には示していないが、2004 年度以降の推移を見ると、A 校の EL 生徒は 2004 年度の 26%から着実に減少傾向にある。他方、B 校はロサンゼルス市中心部に近く、新来の移民の流入が多い地区にあるため、英語を話せない生徒の転入が絶えない。B 校は 2007 年度までは生徒数 4,000 人を越える大規模校だったが、2008 年度に B 校の過密状態緩和を目的に建設中であった新設の高校が近隣に開校し、そこに生徒が吸収されたため、生徒数が約 1,472 人に減少した。

A 校の無料・減額ランチ受給者割合は 67%で、LAUSD 全体 (75%) を下回るのに対し、B 校は 86%と LAUSD 全体を上回っていた。この数字は B 校がヒスパニック系移民コミュニティにあり、新来の貧しい移民が多いことと関係していると考えられる。

表 2. 特別プログラム (2008-09 年)

	A 高校	B 高校	LAUSD 全体
EL 生徒 (English Learners)	494 (18%)	696 (47%)	32%
無料・減額ランチ受給者	1,786 (67%)	1,274 (86%)	75%

出典 : California Department of Education, Educational Demographics Office, Language Census より作成

2007 年度、カリフォルニア州全体で EL 児童生徒は 50 以上の異なる言語を第一言語としていたが、その内約 85%がスペイン語を第一言語とした。2008 年度の対象校における EL 生徒はスペイン語を第一言語とする者が最大で、A 高校 359 人 (EL 生徒の 73%)、B 高

校 654 人（同 94%）であった。

表 3 は、2007 度の中退率及び卒業率を示している。中退率は、A 校 18%、B 校 39%であった。B 校は LAUSD 全体の中退率（26%）、カリフォルニア州全体の中退率（19%）より高い。中退するリスクを高める要因には、家庭の貧困、英語の熟達度、学校での成績、社会関係資本¹⁰⁾などがあるという（バトラー、2009）。B 校の中退率が高い要因として、まず EL 生徒の割合が 47%と英語力の乏しい者の多いことが挙げられる。また、自分の子どもの学業継続を支援するために必要な知識や情報、英語力、教育などの資源を保護者が持ち合わせていないために、子どもの学業継続が困難であることが推測される。さらに、移民家族に目立つ複雑な家庭事情も影響していると思われる。B 校の A 教師は、「ほとんどの子どもたちの家庭は複雑で、なんらかの問題を抱えている。小さい頃は母国で祖父母と一緒に暮らしていて、大きくなってアメリカに呼び寄せられたために親との関係で悩んでいる子どもや、朝方まで働いている生徒、在籍中に妊娠・出産のため休学し、復学してきた女子生徒など、それぞれが問題を抱えている」と語っており、移民家族の不安定な家族関係も陰を落としているようだ。

卒業率に関して、A 校（79%）はカリフォルニア全体（80%）や LAUSD 全体（72%）とほぼ近い値であるのに対し、B 校は 50%と低く、中退率の高さが卒業率の低さに響いていた。

表 3. 中退率及び卒業率 （2007-08 年）

	A 高校	B 高校	LAUSD 全体	カリフォルニア州全体
中退率	18%	39%	26%	19%
卒業率	79%	50%	72%	80%

出典：Los Angeles Unified School District, School Accountability Card Report より作成

(3) EL 生徒に対する教育プログラム

カリフォルニア州の公立学校で、EL 生徒が受けている教育プログラムは以下の通りである¹¹⁾。

1. English Language Development (ELD)

生徒の英語能力レベルに応じた英語教育プログラムで、英語のリテラシー向上を目標とする。

2. ELD and Specially Designed Academic Instruction in English (SADIE)

ELDに加えて、英語以外の必須教科について少なくとも2科目を SADIEを通じて指導する。SADIEでは、授業は英語で行うが、特別に考案されたプログラムを用いる。

3. ELD and SADIE with Primary Language Support

ELDに加えて、英語以外の少なくとも2科目について、必要に応じて生徒の母語を用いて指導する。授業は主として、英語を使って指導するが、語彙や概念などの意味を明確化し、生徒の理解を助ける場合などに生徒の母語を使って説明する。

4. Not Receiving any English Learner Services

特別な教育プログラムは提供していない。

表 4. 各々の教育プログラムを受けている EL 生徒数 (2008-09 年)

教育プログラム	English Language Development (ELD)	ELD and Specially Designed Academic Instruction in English (SADIE)	ELD and SADIE with Primary Language Support	左記3つ以外の教育プログラム	特別な教育プログラムを受けていない	計
A校	472 (96%)	0 (0%)	0 (0%)	14 (3%)	8 (2%)	494
B校	108 (16%)	333 (48%)	78 (11%)	156 (22%)	21 (3%)	696

出典：California Department of Education, Educational Demographics Unitより筆者作成

A校では、ELDのクラスのみを受けているEL生徒がほとんど(96%)であった。一方、B校では、ELDに加えて、教科を少なくとも2科目SADIEを通じて受けている者が最も多い(48%)。次に多いのが、ELDやSADIEを含まないプログラム(22%)である。その次が、ELDだけを受けている生徒(16%)である。ELDのクラスに加えて、教科を少なくとも2科目生徒の母語による指導を織り交ぜた授業を受けている者は78人(11%)であった。

4. A高校及びB高校におけるEL生徒への言語教育の実際

(1) 教科の理解につながるESLカリキュラムと教材

先述したように、カリフォルニア州ではEL生徒に対する言語教育は比較的制度化されている。例えば、LAUSDのカリキュラム及び教材は、EL生徒の英語力向上だけでなく、教科の理解促進を目指した教育方針が採用されており、その端的な例の一つがEL専用の教科書の存在であろう。

筆者の訪問時、A校及びB校ではEL生徒用の教科書として、Hampton-Brown社の“High Point”シリーズが使われていた。A校のK教師は教科書について、「私たちのカリキュラムの教科書は、英語だけでなく教科を教えるようにデザインされている」と語っていた

12)。実際、教科書の各ユニットには「語彙」「構文」「読解」「作文」などの他、最後の方に社会や数学、科学などの教科と関連づけて学習できる「教科内容との関連性 (Content Area Connection)」のレッスンは掲載されている。

(2) 生徒同志の学び合いの環境づくり

Freeman and Freeman (2001) は、第二言語学習者が授業中に社会的交流 (social interaction) あるいは協同学習 (cooperative learning) ¹³⁾に参加することの有用性を主張している。このような知見は、LAUSDの学校教育の現場に影響を与えているようで、教育方法として協同学習が積極的に取り入れられている。多様な文化的背景を持つ生徒が在籍するクラスでは、授業運営において生徒の多様性を如何に活かしていくかが重要な課題の1つとなる。協同学習では個々の生徒の持つ多様な経験や知識、関心が、グループ内で学習を進める上で貴重な資源となりうる。このような学習方法は、英語が十分ではない生徒にとってとりわけ重要である。なぜなら、協同学習では英語話者の生徒と非英語話者の生徒が、グループ活動を通じてコミュニケーションを図ることで非英語話者の英語の読み書き能力の向上が期待できるし、非英語話者は自分の知識や経験をグループ活動に生かすことで自信が生まれる。このような学び合いを通して、英語話者、非英語話者双方が文化的背景の異なる者に対して肯定的な態度を育むことができるのである。

B校のESL-1¹⁴⁾というクラスでは、協同学習が学習形態の中心となっていた。クラスを半々の5人ずつに分け、机を円形に並べて授業を実施していた。担当のF教師からの聞き取りでは、この学習法を取り入れる意義を次のように語った。

私はこのようなやり方 (グループ活動) が好きです。なぜなら、このようなやり方だと、生徒同士話ができるし、お互いに助け合うことができ、学びあうこともできる。ときどき、私の説明が理解できなくても、それを理解している友達が説明してあげることができれば、他の生徒の理解につながります。(中略) それに、生徒たちは友達と会話をしながら課題をこなせるので、楽しく勉強できます。(中略) このようなインタラクティブなやり方は、彼らにとって有効だと思う。

円形に座席を配置することで、生徒同士お互いの学習の理解度が確認しやすくなるし、教師の説明が聞き取れない場合は、同じグループの生徒から教えてもらうことが容易になるというメリットがある。もちろん教師は課題をさせっぱなしにするのではなく、こまめに机の間を回り、一人一人の学習状況を確認する時間を十分にとっていた。時には、生徒の隣りに座って、課題をきちんとこなせているか確認し、必要に応じて説明を加えていた。

B校の別のクラス（ESL-3クラス）でも、ライティングの練習で協同学習を取り入れていた。教師は教科書の内容を理解できているかを確認するためグループ学習を実践していた。クラスを4つのグループに分け、各グループに対して異なる質問を出す。教師が白板の上部に水色のマーカーで質問文を板書していき、そのすぐ下にグループ毎の解答を異なる色のマーカーを使って書き込んでいく。最後に教師が3色目のマーカーを使って、白板上で直接添削しながら答え合わせと解説を行っていた。担当のS教師にこの学習法について尋ねると、「かつては、教師が一方向的に説明するやり方が一般的だった。学力の高い生徒と勉強が遅れている生徒は分けて指導していたが、現在は、能力の異なる集団を同じグループに統合して指導する方法が主流になっている」との説明があり、このような協同学習が教師にも広く支持されているようだった。

(3) 読書の奨励

EL生徒への言語教育において、読書も重視されていた。例えば、B高校のESL-1のクラスでは、F教師が教室の一角に図書コーナーを作って、様々な図書を展示していた。生徒はこれらの図書の中から、興味のある本をいつでも好きな時に自由に借りることができる。

Krashen (1993)によると、「自由読書 (Free Voluntary Reading)」が言語教育の要になるという。自由読書とは、課題として与えられて読むのではなく、自分が読みたいから読む読書（本を読む楽しみを味わいながら読む）のことである。自由読書はリテラシー（読解力、文章力、語彙、つづり字力）を発達させるが、これは中学・高校の第二言語や外国語の指導についても言える。前出のA校のK教師は、自由読書の利点について次のように話していた。

助成金を得て、たくさんの本を注文しました。生徒は教科書以外に本を読まないのでも読書を勧められています。生徒たちはたとえ小説でも、だいたいは非常に難しいのでフラストレーションを感じてしまいます。一般の小説は、ほとんどの場合とても難しいのです。それに比べて、私が選んだこれらの本は厚さも薄く、内容もとても易しいので早く読めます。理解できない単語は少ししかありません。このクラスはとても多様で、このような本を数分で読むことができる生徒もいます。

このクラスでは、教師自身が選定した図書リストを作成して、生徒に渡しているという。

（読書は）語彙の強化に役立ちます。授業で毎日一つの章を読んでいます。本を読まない生徒も多いので、読書を求めています。各一冊を1週間で終わり、一つの章につき、一つの質問をしま

す。前回の授業は、ティーン・ストーリーを読みました。異なるジャンルを用意しています。(中略) ジャンルごとに色分けしたシールを本に貼りつけ、ブック・リストも同じジャンルごとに色分けしています。今後、少し異なるジャンルのものも紹介する予定です。ティーン・ストーリーを最初に読みましたが、それはオレンジのステッカーです。この黄色のステッカーは、アクション・アドベンチャーのもので、自然と闘う人々についての物語です。こちらはノン・フィクションでブルーのステッカーです。来週読むのが歴史フィクションです。恐らく、あと2、3の異なるジャンルのトピックを紹介することになると思います。

このように、図書リストのジャンルは実に多彩で、小説からノンフィクション、スポーツ、ミステリーに至るまで、生徒たちが飽きずに様々な分野の単語や語彙に触れられるように工夫されていた。

5. 結論

カリフォルニア州では長い年月をかけて、英語能力が不十分な児童生徒に対する教育プログラムが整備されてきた。法制度面の整備に加えて、教育カリキュラムの改善、教員養成研修などの取り組みなどが実施されてきた。今回調査したA校及びB校でも、州の教育方針に基づいた様々な教育プログラムがEL生徒に対して実施されていた。

調査対象高校の特徴として、EL生徒の割合はA校よりB校に多く、無料・減額ランチ受給者世帯の割合もB校が多い。中退率は、B校が約4割と高く、卒業率も半数にとどまっている。B校の中退率が高い要因として、新来の移民の多い低所得層居住地域にあることと関連していると考えられる。新来の移民の子どもの英語力は低い傾向にあり、入学先の高校のプレースメントテストでEL生徒と判断され、ELDやSADIEなどの特別なプログラムで指導を受ける者が少なくない。

両校のEL生徒に対する教育現場では、個々の教師の教育理念が反映され、様々な工夫が見られた。教師たちは生徒同士がお互いから学び合うことができる協同学習を積極的に取り入れており、教師たちへのインタビューからこの学習方法のメリットについての声が何度も聞かれた。この学習方法は英語を母語としない生徒の英語力向上や教科の理解を促進するだけでなく、何よりも彼らがグループ活動のなかで自分の得意分野を生かすことで仲間へ貢献でき、そのことが自尊感情を高めることにつながるという特長がある。

Krashenは言語教育において、伝達内容に焦点を当てる内容中心の活動の重要性を指摘している(Krashen and Terrell, 1983)。学習者が興味を引くような話題を中心とする活動が望ましく、言語以外の何か新しい事柄を学ぶことを目的とする活動が重要だという。具体的な手段としては、スライド、個人の発表、音楽、映画、ニュース放送、読書、討論などが使われる。

観察した両校の ELD 等のクラスでは、英語力向上の方法の一つとして読書を奨励していた。F 教師と K 教師は、補助教材として独自に図書リストを作成して生徒に貸し出しており、読書を通して英語のリテラシーを伸ばすことに力を入れていた。その際大事なことは、できるだけ難しい本は避け、多彩なジャンルを揃えることだという。

以上のように、調査対象の 2 校では、英語力が不十分な生徒に対して、概ね制度化されたカリキュラムに沿った教育活動が展開されている一方、学校現場で日々生起する個別の様々な課題に柔軟に対応していくため、教師たちは自らの教育者としての理念や教育理論を基に生徒たちが学業を途中で断念することのないよう、教育方法を工夫していた。

注

(1) 二言語教育とは、英語が不十分な児童生徒を対象に英語と英語以外の言語を使用した教育活動である。アメリカでは 1968 年に最初の二言語教育法が制定され以来、長い歴史がある。

(2) 2010 年 3 月にロサンゼルスにある 2 つの公立高校を訪問し、授業観察、ならびに教師やバイリンガル・コーディネーターらへの聞き取り調査を行った。

(3) モニターモデルは、「習得—学習仮説」「自然順序仮説」「モニター仮説」「インプット仮説」「情意フィルター仮説」の 5 つに仮説によって構成されている。

(4) 本稿では、「第一言語」を生まれてから初めて覚える言語（母語）、「第二言語」を母語の次に習得する言語（例えば、移民の子どもがアメリカで習得することになる英語）という意味で使う。中島は、母語を「子どもが会う『初めてのことば』」と定義している（中島 2009 : 12）。

(5) EL 生徒の定義は、英語が母語ではない生徒で、英語を学習している者である。

(6) 第 1 学年から第 12 学年までの合計人数である。

(7) 一般に ESL (English as a Second Language、第二言語としての英語) と呼ばれるクラスのことである。

(8) LAUSD はカリフォルニア州で最大規模の学区である。

(9) 無料・減額ランチ受給者 (Free/Reduced Price Meals) とは、貧困家庭の児童生徒に対して学校のランチを無料で提供する社会福祉施策の一つである。

(10) 社会関係資本 (social capital) とは、人脈・人間関係に関する資本のことで、例えば保護者の両方と一緒に住んでいるか、保護者が学校の勉強を見てやっているか、兄弟姉妹の数、兄・姉で大学に進学しているものはいかなどである。

(11) California Department of Education, Educational Demographics Unit の資料を元に作成した (<http://dq.cde.ca.gov/dataquest/>, アクセス日 : 2010 年 3 月 5 日)。

(12) この“High Point”の教材については、教師の間で賛否両論あるようだ。別の教師は、“High Point”の教材の内容は中学校向けなので、高校の授業には適さないと思うと話していた。

(13) Freemanらは、他に「collaboration project」「collaborative activities」という用語を使用している。

(14) EL生徒はESL-1からESL-4にレベル分けされたクラスで学習している。

参考文献

- Baker, C. (1993). *Foundations of bilingual education and bilingualism*. Clevedon, PA: Multilingual Matters. (岡秀夫 (訳) (1996). 『バイリンガル教育と第二言語習』大修館書店)
- バトラー後藤裕子 (2009). 「日本語学習児童生徒教育への提案——アメリカ合衆国の経験を踏まえて——」 『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究会紀要』5, 1-21.
- California Department of Education (1999). *Educating English learners for the twenty-first century*. Sacramento, CA: California Department of Education.
- Crawford, J. (1999). *Bilingual education: history, politics, theory and practice*. 4th ed. Los Angeles, CA: Bilingual Educational Services, Inc..
- Cummins, J. (1981). “The role of primary language development in promoting educational success for language minority students. In California State Department of Education, Office of Bilingual Bicultural Education (Ed.)” , *Schooling and language minority students: a theoretical framework*. Sacramento, CA: Evaluation, Dissemination and Assessment Center, California State University, pp.3-49.
- Freeman, D. & Freeman, Y. (2001). *Between worlds: access to second language acquisition*. Portsmouth, NH: Heinemann.
- Hakuta, K. (1986). *Mirror of language: the debate on bilingualism*. New York, NY: Basic Books, Inc..
- Hakuta, K., Butler, Y. G., & Witt, D. (2000). “How long does it take English learners to attain proficiency?” Santa Barbara, CA: UC Linguistic Minority Research Institute.
- 小林宏美 (2008). 『多文化社会アメリカの二言語教育と市民意識』慶應義塾大学出版会
- Krashen, S. (1993). *The power of reading: insights from the research*. Englewood, CO: Libraries Unlimited, Inc. (長倉美恵子・黒澤浩・塚原博 (共訳) (2008). 『読書はパワー』金の星社)

Krashen, S. (1996). *Under attack: the case against bilingual education*. Culver City, CA: Language Education Associates.

Krashen, S. & Terrell, T. (1983). *The natural approach: language acquisition in the classroom*. Hayward, CA: Janus Book Publishers. (藤森和子 (訳) (1991). 『ナチュラル・アプローチのすすめ』大修館書店)

中島和子 (2009). 『言語と教育』海外子女教育振興財団

Swain, M. (1985). "Communicative competence: some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development." In Susan M. G. and Madden, C. G. (eds.), *Input in second language acquisition*. Rowley, MA: Newbury House Publishers, pp. 235-253.